

明大寺ブルース

太 田 行 人

(基礎生物学研究所名誉教授)

たしか74年のくれのことだったと思います。基生研創設の作業グループ、いわゆる桑原実行委員会の面々が岡崎市きもいりのバスで明大寺かいわいの建築予定地を下見したことがあります。団勝磨先生もごいっしょだったところをみると桑原実行委の上部機関だった団委員会との合同検分だったのかも知れません。愛知教育大（岡崎高師）を失い、地域再活性化に腐心していたはずの岡崎市が、この大規模な国立共同研究機構の誘致に肩入れしたのもむりはありません。市の教育長みずからが案内役をつとめるほどの力のいれようでした。荒れ放題の旧校舎が散在してゴースト・タウンみたいな感じの教育大跡地をあるきながら、そして同大学の旧図書館の屋上に立って四方の地勢を案じながら、そこに現出した今日の研究所群の偉容を思えばくことのできたひとがはたして何人いたでしょう。

わたしは、77年12月に情報制御研究部門担当の客員教授を命ぜられました。わたしと最初からの相棒だった近藤孝男助手とに与えられた実験用空間は、上記の旧図書館のとなりの広い雨天体操場（？）の一隅でした。そのコンクリート床には買い集められつつあった大小の備品類が雑然こん然と押しこめられており、わたしたちはわずかなすきを文字どおり飛石づたいに歩かなければなりません。金谷、神谷両研はこの旧図書館の一階ではそばそながらすでに開業していました。金谷研から突然白衣のわかい女性が飛び出して、通りすがりのわたしに顔写真を撮らせてくれといいました。なんでも基生研職員の人別帳をつくっているところだそうです。それが金谷教授のよき協力者である白井浩子助手との初顔あわせでした。

三階には基生研と生理研の教授室が設けられており、わたしたちも神谷教授室のとなりにオフィスを一部屋もらいました。近藤君はそこで毎晩おそくまでパソコンをいじりました。あげくには椅子をならべての寝とまりだったようで、心ないわたしの時ならぬ出勤が彼の寝こみを襲うかたちになったことがあります。彼のこの勉強があととわれわれの研究室全体をおおいにうるおすことになります。大型スペクトログラフ建設の尖兵役の渡辺正勝助手もわれわれの部屋に同居しました。彼のものしずかな挙措にそのいくぶんペダンチックな話ぶりはよく映（うつ）りました。オフィスの東窓からは本建築の進行状況がつぶさに観察されました。

旧図書館はまだけっこう新しい建物でして、南面の玄関前にはタイルばりのかなり大きな円形池が澄んだ水をたたえていました。この建物の二階の会議室は初期の研究会の会場にもなりました。すこしあとのことになりますが、わたしたちの「内因性日周リズム」研究会も79年2月にここでひらかれています。この研究会は時間生物学関係の国内会合としては最初のものだったのではないのでしょうか。寒中とはいえよい天気めぐまれ、記念写真には曇りがりの陽光をうけたまぶしそうな顔がならんで

います。

78年5月某日、待望の5台のコイトロンが搬入され雨天体操場の東壁にそってならべられました。というより、そこへむりやり割りこませたのです。これでまがりなりにもわたしの研究題目「光周計時機構」の予備実験をはじめることができるようになりました。この仕事は50年代以降のわたしの主要課題だった「植物の個体発生解析」のスケジュールをしめくくるものでした。H. G. Lundegardhのいう個体生態学をつよく志向するわたしは花成誘導にかかわる生理時計の機能の徹底調査を目標にしました。生理時計の分子の構造解析のほうは他のスタッフにまかせ、遠からぬ将来それを部門の中心課題にすえるというのが、部門発足当初からのわたしの経営構想でした。やがて計時機構部門で展開されるアカパンカビの子実体形成リズム（中島秀明助教授）、ウキクサのカリウム・イオン吸収リズム（近藤助手）、そしておなじウキクサのグリセルアルデヒド-3-リン酸脱水素酵素能リズム（後藤健奨励研究員）などの研究は方法こそちがえいづれも生理時計の構造解析をめざすものです。

わたしは前任教室（名大理生物）では長日性ウキクサ (*Lemna gibba* G3) を主材料にしました。基生研では短日性ウキクサ (*L. paucicostata* 6746) に手をひろげ、光周性植物に共通の計時機構をさがしたいと思いました。ウキクサは体制の簡単な小型の浮遊植物です。一度の実験に大量の無菌培養を容易に供試できるので光周計時実験の精度をかなりの程度にまで高めることができます。わたしの独自の時計解析法である min-SD 法や min-LD 法はウキクサのこの特質に依存しています。

当初の半年ばかりはさんざんの不首尾でした。どうあがいてもウキクサが花をつけてくれないのです。奇妙な符合ですが、60年に名大で *L. gibba* の実験をはじめたときも最初の1年間はまったく花をさかせることができませんでした。コイトロンあるいは培養室の内装塗料に有害な溶媒がふくまれており、その溶媒が揮発し去るのに意外に長い時間が必要だった、ということではなかったかと思います。ことはどさように花成は繊細な過程なのです。その後、花成度データのばらつきがひどくて仕事が頓挫した期間がありましたが、これが反復使用のガラス器のかすかなよごれのせいだと気づくまでにはずいぶん無駄な調査をくりかえさせられました。

79年春に名大退官、当然ながら客員教授の併任も解消しましたが、同年夏には基生研常任教授に返り咲き、新設の計時機構研究部門を担当することになりました。「返り咲き」とはいささか大時代なせりふのようですが、半年前までは頑固にこばみつづけたウキクサが、このたびは一転してみごとに花をつけはじめたといううれしい事情をからませたわたしの話芸のこまかいところ。浪人生活の3か月間はせっせと水彩画をかいていました。リアルな写生やイラストまがいの抽象的なものなどいろんなものをかいて、あらためて自分の可能性をためてみました。あとは基生研を退官してからのお楽しみ、となごり惜しい筆をすてての宮仕え再開でしたが、さて、いよいよ世にいうところの悠々自適の身となった昨今、ほとんどまったく絵筆をとる気にならないのはどうしたことか、われながら合点がいけない。

この間に基生研の第一次建築は完成し移転の大騒動も一段落していました。ネコの手も借りたひどいそがしい期間だけ留守にしていた形のわたしが新建築にのうのうと上がりこむのはなにやら尻こそばゆく不安な予感すらあったのです。予感はやがて現実となる。81年末あたりから動きはじめた第

二次建築計画ではわたしは建築委員長をやらされ、協力者だった本多技術課長ともども、不特定多数の皆さんからつるしあげを食うハメになります。しかも、このたびはわたしは完工（'83年6月）を待たずして基生研を退散するという因果なめぐりあわせを甘受しなくてはなりませんでした。

79年9月には制御機構研究系主幹としてのわたしに有能な秘書、河合紀代美夫人がつきました。12月には前記の中島助教授が着任しました。ちなみに、技官の藤村洋子嬢は翌年4月の発令です。ふたりの婦人の加入が研究室をめっきりあかるくしました。

79年11月の竜美が丘宿舍入居までは、わたしは研究所三階の自分のオフィスの長椅子をベッドがわりの寝とりと名古屋の自宅での「外泊」とが半々の生活でした。研究所地下の東南隅、金谷研のはずれ、技術課長室のとなりの簡易浴室をわたしはずいぶん利用させてもらいました。名だたる宵っぱりの金谷研に気がねしながらタオルや石鹸をいれた小桶をだいて階段をおりていくのは、かくし女のもとにしのおようで、なかなかおつな夜のふぜいでした。オフィスのドアには鍵をかけてやすむのですが、深夜、合鍵持参で巡回する守衛にのぞきこまれるのには閉口したものです。

「外泊」に通う道すがら岩津大橋あたりからのぞむ矢作川の夕ばえは息をのむ美しさです。それはふるさと八雲つつ出雲のみずうみの夏のたそがれを思いださせます。わたしはこの「矢作の残照」を私家版「岡崎八景」の筆頭におくことをためらわないでしょう。

視界をさえぎるものとならない公務員宿舍8号棟5階の夜明けは冬でも早い。単身赴任のねぼけまなこをこすりながら下界をながめると、はるかな1-3号棟とわたしたちの7-8号棟とのあいだにひろがるだだっぴろいあき地（4-6号棟の建設予定地）は朝日に輝くいちめんの霜です。と、2号棟の住人で、これまた単身赴任であられる桑原基生研所長（のち、機構長）の早朝ジョギングの勇姿があらわれました。道路わきになにをついばむカラスが群れています。かれらは先生の姿を見かけるといっせいに飛びたって道をあけます。清新基生研の象徴たる所長の恩威はかくのごとく禽獣にもおよぶかと、わたしは感慨をあらたにするのでした。

実験は80年ごろからようやく本格化しました。人工気象室の整備にともなって、最盛期には培養装置のうちの10台をも一度に使わせてもらえたこと、それに近藤助手の手で各種装置の自動化が着々進められたこと、これが持ち時間（わたしの常任教授としての任期は79年夏から83年春まで）のすくないわたしをどれだけ助けたか知れません。当時の実験日誌にしるされたスケジュールの過密ぶりはラッシュ時の列車運行表そのけです。この3年はひかえめにみても実質5年には相当したと思います。少々つかれましたが、おかげさまで宿願の光周的計時（限界明期の構造、明中断効果）にかかわる統一的な機構をかいま見ることができ、一応の満足感をみやげに基生研を去ることができました。

（1987. 2. 10. 記）